



内山永久寺の扁額

内山永久寺の扁額



①

宝治元年九月月又
 金剛乘院 内山真言堂額と波止



②

「扁額集」の字（陽明文庫所蔵）

昔、天理市に内山永久寺というお寺がありました。大和国屈指の大寺院でしたが、明治維新の廃仏毀釈のときに、跡形もなくなってしまいました。ところが地元の旧家に、その寺のものと言われている扁額が残っていました。左ページの写真です。見るからに古そうな額に、変わった字体で「金剛乗院」と書いてあります。

奈良文化財研究所で調査をすると、まず、額縁の向かって左側の部材は、現在1218年までの年輪が残り、その外側は30年分くらいの年輪が削り取られていると想定できました。したがって、1248年前後に伐採されたことになります。

更に、右ページの①②の写真を見てください。これは京都の公家の近衛家に伝わった古書、「扁額集」の一部です。「扁額集」とは、昔の書家が集めた、扁額の字の手本集です。「扁額集」によると、これらは弘誓院流の祖の書家である藤原教家が、宝治元年（1247）9月に筆を執ったもの。①②とも内山永久寺の扁額として記したものの、①を真言堂の額に採用し、②は採用しなかったと書いてあります。実際、左ページと見比べると、①はそっくりです。鎌倉時代の1247年に書家に字を書いてもらい、すぐにその字を板に写して扁額を作ったのでしょう。

実態がほとんど分かっていない内山永久寺の歴史に光をあてる資料です。このような鎌倉時代の貴重な資料が、ひっそりと地元で守り伝えられていたとは驚きです。

（文化遺産部 吉川 聡）